

『独居（愛犬と暮らす）認知症とアル中男性の数々の語りつくせないエピソード』

チーム名：居宅介護支援事業グリーンヒル淳風&寝屋川市第六中学校区地域包括センター

【はじめに】

2025年には認知症700万人超となり65歳以上の5人に1人は認知症となる時代がきます。自動車運転の問題もありますが、孤立化も問題となっています。調査によると「親しい近所付き合いをしていない」と回答した人は女性が39.1%に対し、男性は63.9%に及ぶと言われています。また、その孤立感がアルコール依存・セクハラ行為を誘発してしまう悪循環となってしまうのです。

この事例を通じて今後、認知症であってもその方の意思が尊重され、住み慣れた地域で安心して暮らし続けることができるよう、どのような支援ができるかエピソードを通じて考えていきたいと思えます。

【取り組み】

【事例】

K. Y氏（男性）享年76歳

既往症：アルコール性肝炎・アルコール依存症
アルツハイマー型認知症・高血圧症
変形性腰椎症・慢性気管支炎

日常生活自立度：J2 認知症：IV

検査：HDS-R：10点 MMSE：7点

独居で子供無し。18歳の時に鉄工所の仕事で左右第2,3指欠損。定年まで働き、妻と暮らしていたが、平成18年妻が階段から落ち他界。それ以降愛犬と暮らす。お金に執着が強く金銭トラブルで兄弟とは疎遠になっており、近隣でも寄付や集金でトラブルになっていた。日課は毎日、朝・夕の愛犬の散歩と焼酎を10程度飲んでた。体調不良（不眠・倦怠感）を理由に救急車を呼び、病院で点滴を受けると落ち着き、タクシーや救急車で自宅へ戻ることが月2~3回あり、消防署から注意を受けるほどであった。たばこを吸うことや鍋を焦がすこともあり近隣から火の不始末の心配もあった。本人は栄養状態が悪化しているにもかかわらず、焼酎・ビ

ールでお腹を膨らませ、愛犬にはいいお肉いい食材を食べさせていた。セクハラ行為によりヘルパー事業所が11ヶ所も変更となりケアマネジャーも交代となりグリーンヒル淳風での支援がスタートする。

○主治医との連携

○社協CSW・自治会長・包括との話し合い

○見守り体制強化 パーマ屋さんから包括

○本人の兄へのアプローチ

○飲酒をコントロール？！

○小規模多機能ホームの体験

○入退院対応や訪問看護との連携

○保健所との連携

○医療保護入院

○愛犬ジュンの受入 ⇒GH 淳風

○市長申立 成年後見人制度活用

○成年後見人との連携

「地域」+「家族」+「関係機関」を巻き込みながら、限界まで愛犬と住み慣れた自宅での生活を見守りながら支援してきました。

【考察】

この認知症・アルコール依存の事例を通じて自分のことより愛犬を愛し、いい食材を食べさせ、認知症であっても毎日必ず朝・夕犬を散歩に連れて行く生き様に感銘を受け、勉強させていただきました。本人に寄り添い、本人の意向をくみながら、認知症であっても～尊厳をもって最後まで自分らしく～あるためには、「地域」の見守りや医療介護の関係機関との連携が不可欠であることを痛切に感じさせられました。今後ますます増加する認知症高齢者の方に対し、住み慣れた自宅で過ごしていただくためにも地域共生社会の実現に向け、「地域」+「家族」+「関係機関」につなげ、一緒に支え見守ることが大切であることを実感し、そういう地域作りができるように連携していきたいと思えました。